

4. 本書 p. 20
5. А. Н. Гвоздев: “Современный русский литературный язык” ч. 2 Изд-во “Просвещение” М. 1968 г.
6. I の p. 6
7. 注 (2), (ii) に所載 上掲書 p. 225
8. 同上 p. 223

НИКОЛАЙ НИКОЛАЕВИЧ ПРОКОНОВИЧ : *ВОПРОСЫ СИНТАКСИСА РУССКОГО ЯЗЫКА*
 Изд-во “Высшая школа” Москва
 1974 г.

Harry T. Moore: *The Priest of Love: A Life of D. H. Lawrence*

井上 義夫

その奇異なる為人のために、D. H. ローレンスの伝記は殊に中立的な立場からは書き難いものらしい。妻フリーダや C. カーズウェル、あるいは J. チェンバーズらの如く、当初よりローレンスの偉大さや優しさを讃える意図で書き始めた者は、それぞれの記憶に刻まれた印象の度合に応じて、なるほどこの天才の人物をよく伝え得た。逆に、ローレンスという人格を己れの人格で量る意図を心底に持つ者は、M. マリの如く、卑小かつ病的な利己主義者としてローレンスの姿を伝える場合が多かった。R. オールディントンの手になる伝記もいささかその嫌い無しとはせぬが、この種の伝記は大半ローレンスを藉りて

自身の卑陋を語る点で、読者には要らぬ不快を与えるものであった。むしろ梓に上せぬのが幸いであったような書である。

元来ローレンスという人に随うには、この天才の世間的意味に言う欠点を許容する寛恕か、さもなくば絶対の帰依が不可欠であった。後者の感情はローレンスの女性崇拜者が彼に対して抱き、よく前者の寛容を持した者は、著名な人物では独り A. ハックスレーのみであったと考えられる。ローレンスの死後、その知遇を得た人々が伝記を著した後、この作家に面識ない所謂ローレンスの研究家が客観的な眼でその生涯を見直し始めたことは当然のなりゆきであった。なかでも H. T. ムアによる伝記は、その細密さと多種の資料の活用によって異彩を放つものである。ムアは恰もローレンスの愛読者に関心ある事柄を知悉するかの如く、遺漏なくそれらを明るみに出して読者を惹きつける。例えば J. チェンバーズのしたためた草稿がローレンスの筆を俟って『息子と恋人』の一節に変わる様が如実にここに再現される。クロイドン時代の Davidson 小学校校長が往時のローレンスを回想して著者に宛てた長文の書簡は、目新しい資料として読者を瞠目させ、イエイツ、バウンド等と同居した会合の、純真にして要領を得ぬ若きローレンスの挙措も、Ernest Rhys の回想記から適切な箇所て引用される。あるいは『イタリアの薄明』等の初出の異稿の紹介は、その存在の指摘により貴重であり、読者を退屈させぬ範囲で能く改稿の意味を説き得てもいる。

別してこの伝記は、ローレンスに係わった人々の経歴に詳しい。フリーダ・ウィークリーは言うを俟たず、J. チェンバーズ、ルイ・パロウズ、ヘレン・コーク、M. マリ等が、その人生の如何様な過去の日にこの天才に遭遇したかを、ムアはつとめて明らかにする。ルイ・パロウズを除けば、各々自らロー

レンスを語った人々であるが、彼らは当然にも己れの昔日を物語ることをしなかった。あるいは幾らかその労を厭わなかった者の回想も、没交渉の人に言い及ぶほどに、客観的、網羅的なローレンス伝を考へだにできなかった。何はさて措いても自身の人生からローレンスを描き出してしまわずには、余りにこの天才の荷は重すぎた。そういう無意識の思惑を、さすがに T. S. エリオットのような人は察知して、例えば M マリの草した *Son of Woman* を賞讃する同じ筆で当の著者を揶揄したのである。ムアはただ、ローレンスが交渉を持った諸々の人物を、時に当人の知らぬことも含めて説明する。読者は少なくとも、ローレンスがどのような人間模様の中をくぐり抜けたかを了知するのである。おそらくこの伝記に扱われた以上の細事は、ローレンスの文学の特殊な問題を闡明する意図を持つ者だけが、一層の知識欲に駆られてこれを穿鑿するであろう。ここに「穿鑿」と言うのは、ムアの伝記が読者をして知らぬ間にローレンスの過去の穿鑿に向かわしめるからで、私らは改めて文学と作家の実生活との相違に思い致さねばならぬように思える。

例えば伝中に、ローレンスと係わりのあった女性各々との関係の性質や、ローレンスに逢着する以前と以後のフリーダの恋愛や、さらには彼女の姉とマックス・ウェーバーとの意外な結びつき等が露見して、読者は己れの関心に好奇心の執拗な眼が入り込んだと実感する。そういう心が自体不純か否かは問題の外として、肝要な点は、ローレンスの文学がそういう次元とは別の場所に成立したという疑いない事実である。ムアの伝記が私たちの卑俗な感情に訴えて興味深いとは、ローレンスの精神の生きた土壌に別の臭気を発散させるに巧みであるという程の意味である。さらには、客観的な立場で書かれたこの著作は、当然にもローレンスの像を明瞭に結ばぬ。マリ

等の過誤を免れて、同時にローレンスという複雑な人間の体臭を毫も匂わせることがない。1954年に上梓された初版本に *The Intellectual Heart* と題したのは著者の本意には非ず、当初より *The Priest of Love* と題したかった、とは序文に言う著者の言であるが、聡明にして而も智に豊かな精神と、感能に靈を祭る高僧と、いずれのローレンスもこの伝記には立ち現われぬ。直接の面識に欠けたことよりも、おそらくムアに、ローレンスに通う資質の一片がなかったという事情の所為であろうか。

思うにムアという人は、つきつめて物を思うことのない人である。逆にローレンスには、強いて事の黒白を決しようとする性向に著しいものがあった。ムアの伝記の欠陥は、この人の学究肌でローレンスが馴染むべくもなかったという一事に起因するものである。他の作家は知らず、ローレンスを語って自身無傷で逃れようとする者の著作は、自ずとその論調に弛みを生じるか、当の作家の志を踏みにじて終わることが常であった。ローレンスその人が満身創痍の状態に居ながら、批評家が資料の山の傍でこれを坐視できる筈もない。ローレンスの伝記を物した人はおおよそ己れもまた傷つき、過去の追懐に泣いたのである。ムアは正当にもマリを称して、「ローレンスの人生に於ける villain」と書いたが、姦悪またよく苦悩したと言うべきである。マリが途方もない相手に組み合って難渋する様子は、その眼さえあれば *Son of Woman* に窺えるところである。私らに皆目見当のつかぬのは、ムアがローレンスの何処に関心を抱いたかという肝腎の一事である。むしろ、ローレンスに関する厩大な資料を収集したムアは、ローレンスその人には関心がなかったと言える。この伝記に名をとどめた文壇人は幾名と数知れずそれら有名無名の人物と事実ローレンスは結果として交渉を持つことになったが、そ

れらを誌して恰も欣喜雀躍たるものがあつたかの如きムアは、おそらくローレンスの心から最も遠い処にいた。偉大な作家の私生活とモデル問題は、世の東西を問わず物議を醸す性質のものである。殊にローレンスは、恩義ある人を悉くその作品で貶めたとして悪名高い作家であるから、無論各々の交渉を紹介して読者が面白く読まぬ筈はない。それはそれで構わぬとして、不都合な点は、ローレンスが恰も伝記作家と同程度に品下る心で人に接したという印象を残すことである。ローレンスに交わりを求めた人が大略卑俗な意図でそうしたと極言するのはよい。カーズウェルは自らローレンスにそう語って、私らにはこの非凡な作家が作中で知己を貶めざるをえなかつた事情を少しく明らかにした。そこに一種ローレンスを崇高化する心理が汲みとられても、真実は語らねばならぬという志はよい。ムアの誤ちは、公平無私の事実を誌すことが可能であると思ひ定めた点にある。しかも事実を洩れなく記すことが、何も書かぬ場合に劣ることを想定しなかつた事にある。例えば、コンウォール滞在中のこととして、ムアは当然にも、Hockingなる一農夫とローレンスの関係に言及する。著者自らこの関係の真相は知る由もない故に、フリーダはMrs Luhanに、二人の間に“a thing”があつたかと問われて肯定的な答を返した。ローレンス自身はカーズウェルに対し強く否定する言を放った、等々の「事実」を紹介するのである。フリーダは心中の事をみな外部に出す女性であつたように思えるが、「好色文学」を草したと名高く、その実人の魂の救済しか眼中になかつた作家の伝記を後世に残そうとする研究家が、収集資料の公表を殆ど無差別に而も読者に半ば阿るごとく行なつたことは悔まれることである。この種の不確定な資料が無用の意味を持たぬためには、これを誌す者に明廉の志があつて、自ずから作品に清冷の気

が通つていなくてはならない。ローレンスの著作が伏字混りて出版されるか否か、そういう事が私らの心を煩わすことがないのは、彼の心中の靈氣たるやその作品に遍満するからである。フリーダによる伝記さえ読者に或る感慨を催すのは、彼女がただローレンスという人にのみ頼つてその伝記をしたためたからであろう。ムアに何故ローレンスの作品に導かれた伝記が書けなかつたかは、氏のローレンス論を見れば大半了解のゆくことではある。この人の感性は、いか様にもローレンスに届かなかつた。そういう凡庸の研究家が、「ブレイクとローレンス」とW. H. オーデンも認めた空前絶後の独創家の生涯に係つた末に、ローレンスに「関する」研究に資するところ大きく、同時にローレンスの片鱗さえ表徴しえぬ奇異なる著作を世に問うたのである。この事態を表すべき言葉を私は知らぬが、とまれH. T. ムアのローレンス伝は、完璧な舞台の上に主人公のみの登場せぬ、仮に「幽霊劇」にも喩うべき必読一見の書なのである。

Harry T. Moore: *The Priest of Love: A Life of D. H. Lawrence*, 1974, London, Heinemann.

Cahiers Marcel Proust 8:
Le Carnet de 1908,
établi et présenté par
Philip Kolb

鈴木道彦

文学の研究は、一面で推理小説に近づいた